

浦戸湾では春季，全長6～10cmのマハゼが衣ヶ島周辺の小型曳き網の獲物として頻繁に採集されました。

第1背鰭は8棘からなります。第2背鰭の1番目は棘で，軟条数は12～15本です。体の鱗は小さくて，鰓孔の上端から尾鰭の付け根まででおよそ53枚です。頬と鰓蓋にも鱗があります。尾鰭にはきれいな点列があります。この点列は尾鰭の下およそ1/4にはありません。第1背鰭と第2背鰭にも点列があります。



2004年6月1日灘で採集したマハゼ，全長約8cm。

眼の中央から斜め前方にやや太い，黒い線が伸びます。口は大きく，上顎の骨の後端は眼の下に達します。

日本のハゼの代表的存在ですが，これが世に出たのは1845年です。オランダのテンミンクとシュレーゲルが，シーボルトが送った2個体を基に*Gobius flavimanus*と命名しました。*gobius*はハゼ，*flavimanus*は黄色がかったという意味です。標本は長崎かその周辺で採られたようです。シーボルトの助手役だったピュルゲルは，「この魚は長崎の川の河口にきわめて普通」とのメモを残しています。標本もメモもオランダ国立自然史博物館にあります。標本番号は1905aとbでした。これらを含めたシーボルトコレクションを見た時の感動は今でも忘れることができません。

2004年12月22日発行 発行者：町田吉彦（理学博士，高知大学理学部教授，
四国自然史科学研究センターセンター長）

本書の内容の無断複製を禁止します。複製ならびに内容についての問い合わせはFAX 088-844-8310（町田研究室直通）をお願いします。